

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 両者の声が呼応する。
- 2 防災用品を取捨選択する。
- 3 大陸を縦断する山脈。
- 4 運命に身を委ねる。
- 5 車が何台も連なる。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 緑化運動をスイシンする。
- 2 仲間のケツソクが強くなる。
- 3 文集のカントウに詩を載せる。
- 4 時間をかけて文章をネる。
- 5 争いを公平にサバク。

たショーウィンドウを見るたびに、自分もこのせまい世界の中に人生をどめられてしまう気がしたものだ。

せつかく来たんだから病院に行けと姉ちゃんは言うけれど、断った。見舞いに来たわけじゃない。

入って左側が待合室。右手は更衣室と衣装ルーム。正面の受付を抜けた先がスタジオだ。明かりをつけたとたん、壁の白さが目を射ることを知っている春太は、スイッチを押す前に目を細めた。

ここも変わっていない。白ペンを何度も塗り直したホリゾン<sup>2</sup>ト。何もない壁の穴うめをさせられているように天井を縦横にはいまわるダクト。背景紙を下ろす手動のロールもクレイン式のライトも、雨傘のかたちのレフ板も、一時代前の旧式。「いまどきのヤワなのよりよっぽどモノがいい」親父はそんな負けおしみを言っていたが、買いかえる金がないだけだ。

スタジオの裏手、暗室の手前の壁に、防湿庫が並んでいる。ガラス張りの冷蔵庫のような棚のそれぞれに、カメラとレンズが親父の不気味なほどの凡帳面<sup>3</sup>で保管されていた。春太が専門学校へ行きはじめても、親父はここには触れさせようとしなかった。

すべてがフィルムカメラだ。大判カメラは三台。一台一台がカメラトランクぐらいの大きさがある。11×14はさすがにもう使っていないだろう。田舎の写真館ではフィルムが入手できない。

恐竜の化石の展示を見ているようだった。実際、どれもが遠からず本当に化石になるしろものだ。

確かに大判カメラは画質がちがう。倉木さんも一台もっていて、作

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(抜き出して答

える問題では、句読点、かぎかっこ等の記号は一字として数えること。)

春太の家は営業写真館(おもに一般客の写真を撮影する店)を営んでおり、父は春太にこの店を継いでもらいたいと考えている。春太はそれに反発し、東京に出てプロカメラマンの倉木さんのもとで働きながら写真の勉強をしているが、ある日、父が突然の病気でたおれてしまう。

「渡邊写真館」という看板の文字がはげかけ、陰気な灰色のモルタルの壁のあちこちにひびが入っているのは相変わらずだ。母屋は表通りに面した店より小さく、裏手にへばりつくように建っている。春太には子どもの頃からそれが「家より仕事だ」と親父が威張りちらしているように思えてならなかった。

写真館に入るには、一度通りに出て、古くさい木製のドアを開けなければならぬ。そう、これも気に入らなかった。

ドアの左手はショーウィンドウになっていて、サンプル写真が飾つてある。七五三。卒業記念。成人式。就活用写真。ウエディングドレスとタキシード。お宮参り。還暦祝い。米寿祝い。どの写真もおとし家を出た時のままだ。

何十年も前に、地元の俳句の先生に墨書してもらったという、額縁入りの宣伝コピーも昔のままほこりをかぶっていた。

『皆様の佳き日を永遠にとどめます』

まだ家にいた頃の春太は、祝い事や記念日の写真がごてごて飾られ

品を撮るときにはそいつを持ち出す。だが、写真家の先生でもないかざり、いまのプロの現場では使えない。クライアントが要求するのは、チェックがしやすく経費もかからないデジカメと、そのデータでの納品だからだ。第一、デジタル化のAはそのうち大判カメラにもおよぶだろう。親父はフィルムカメラにこだわり続けているが、営業写真館だつていまはどこもかしこもデジタルだ。それが生き残るための唯一の方法だから。

4 中卒で大阪の写真館に入つて二十何年も人に使われ続けた親父はきつと、その長い時間と、非効率的に身につけた技術を、無駄だと思いたくないのだ。古いものを愛し、新製品をにくむのは、新しいものがこわいからだ。デジタルカメラを日々手にしているのに、その進化にあつけに取られていまの春太にはわかる。

とはいえ明日の撮影には、フィルムカメラを使うしかない。4×5の大判カメラを手に取りうとして、鍵を忘れてきたことに気づいた。防湿庫の棚にはひとつひとつに鍵がかかけられているのだ。

丸めた背中に声が飛んできた。

「忘れもの」

\* 葉月が顔の前に差し上げた指先で防湿庫の鍵をゆらしていた。

\* 屈託とは無縁のその笑顔から目をそむけて、棚を点検するふりをした。

「おお、悪い」

うかんでいるだろう表情をさとられないように。

「ねえ、お兄ちゃん」

「いやだ」

「まだ何も言っていないよ」

「……あ、ああ」

「もどつてきてよ」

「やっぱりその話じゃないか。」

「お父さんにはもう写真撮るの、ムリかも」

「引退だな。おそすぎるくらいだ。老眼になったらだめさ」液晶モニターをのぞかねばならないデジタルのカメラマンなら。

葉月がぐるりと部屋を見回す。昔から口より表情がものをいうやつだったから、何を言いたいかはすぐにわかった。

「俺はだめだぞ。カメラマンになるんだから」

「お父さんもカメラマンだよ」

「ちがうんだよ、全然」

「どうちがう？」

6 何から説明すればいいんだ。考えたが、うまい言葉が出てこない。どうちがうだろう。

葉月がじいじいと春太の顔をのぞきこんでくるから、苦しまぎれにテキトーなせりふを口から放り出してしまった。

「俺が撮りたいのは人間よりか風景だし」

「風景はどこにでもあるよ。ここのほうが東京よりよっぽどきれいでしょ。東京、行ったことないけど」

こいつは本当に葉月だろうか。長かった髪がショートになった妹の顔を春太はぼんやり見つめ返す。なんか化粧してるし。ジャージの上

葉月がうかべたほほえみは、妹なのに年上の女のもののようだった。やっぱり、こいつは葉月の代わりに送りこまれた別の誰かだ。

葉月はいつのまにかプロアー<sup>\*</sup>を手にしていて、それをつき出して、春太の顔に空気をふきかけてきた。

「おいっ、やめろよ」

やっぱり葉月は葉月か。まだガキだ。春太が怒りの声をあげると、昔とちつとも変わっていない顔をかしげ、くちびるをとがらせてつぶやいた。

「おかしいな」

大判カメラの黒い冠布<sup>\*</sup>には、親父の煙草と整髪料<sup>\*</sup>のにおいがしみついている。春太は鼻の穴をすぼめて、ホリゾントの手前の五人に声をかけた。

「緊張しないでですよ」

じつは自分のほうが緊張していた。ファイндターの向こうには、晴れ着姿の七歳の女の子、四歳八カ月の男の子、もうすぐ三歳だという女の子。そしてスーツ姿のお父さんとお母さん。

七五三の写真だ。カレンダーはもう十二月に入っているのだが、お姉ちゃんがインフルエンザにかかって十一月の半ばにはお祝いができなかつたらしい。お父さんは東京に単身赴任<sup>\*</sup>中で、今日をのがすと年末まで帰って来られないそうだ。

「どう考えたって、断りきれないでしょ」と電話の向こうで葉月がうったえるのは、まあ、もつともだ。

下姿で分厚い眼鏡にゲーム機の光を反射させていた昔の葉月は、春太たちが知らないあいだにゲームの世界かどこかへ吸いこまれてしまつて、別の誰かが送りこまれてきたみたいだ。

「じゃあ、お前がここを継げよ」

これもテキトーな言葉だったのだが、なぜか葉月はうれしそうに目玉をぐるりと動かしした。

「うん、わたしが店主になる」

「なんでそうなる」

7\* 「チーン展開するとなると、誰かがケイエイを考えないと」

家を継ぎたくはないが、渡邊写真館二号店があつて好きにやらせてもらえるなら、考えてもいい。きつと親父よりうまくやれるだろう。

ピンボケの彼方のプロへの道につかれた時、春太はよくそんな夢想をする。自分の思い通りのカメラをそろえ、自分が設計したスタジオで写真撮る。作品をつくる時には大判カメラを使いほうだい。悪くない想像だった――

「いや、これ、なんかちがうぞ。春太は目を閉じ、くちびるを――」

8 「へ」の字にして、ゆるみかけた表情を引きしめる。

その頬を葉月につつかれた。

「なんだよ」

顔をふり向けると、葉月はなぜか「おお」というふう<sup>\*</sup>に目をかがやかせていた。

「こわい顔したつてだめだよ。わたし透視能力を身につけたからね。本当は笑いたいでしょ」

失敗は許されなかつた。この家族のたった一日しかない、いまこの時を、しっかり写真に収めねば。正確に七・五・三ではないけれど、女、男、女ときれいに並んだ三人きょうだいの年齢がきちんとそろるのは一生のうちのみだけだ。

春太の言葉がよけい緊張させてしまったかもしれない。男の子の眉と眉はいまにもくつつきそうだ。よく似た濃い眉毛のお父さんも。まだ若いお母さんはモデル立ちをくずさず、目をくわつと見開いている。いつも真似<sup>\*</sup>をしているんだろう。七歳のお姉ちゃんの両目も、くわつ。ただ一人、プレッシャーと無縁なのは下の女の子。初めての口紅が気持ち悪いのか、くちびるをひよこみたいにとがらせている。カメラより片手にさげたミッキーとミニーが描かれた千歳飴の袋が気になつてしかたがないようだ。

葉月が女の子に声をかける。

「ヒナちゃん、終わつたらまた遊ぼう。なにで遊ぼうか。アンパンマン？」

撮影が始まる前から二歳のヒナちゃんをあやしていた葉月が、カメラの手前にアンパンマンの人形をかざすと、ヒナちゃんがこつちを見たら。うまいぞ、葉月。お前なら本当にここのオーナーになれるかもしれない。

「よし、じゃあアンパンマンごっこしよう」

こちらを見たのはいいけど、ヒナちゃんは赤い振り袖からこつちやな腕を伸ばして、真上に差しあげてしまった。

「はーい」

みんなが笑う。うん、いい笑顔だ。  
撮影には、渡邊写真館にある五つのライトをすべて使う。先月、二回の撮影を経験しているし、高校生の頃から「これがお前の将来の仕事だ」と言いたげな親父にむりやり助手をさせられていたから、基本はわかっている。

斬新さやインパクトやアート性、そんなものとは無縁の写真。倉木さんが言う「ベタな写真」だ。

でも、いまは親父の流儀に従おうと思う。  
目の中の五人家族は、斬新もインパクトも望んでいない。アート性なんか、つまんでほしい、だろう。いまこの一瞬の、みんなの少しでもいい表情を残したいだけだ。広告写真のように、たくさんの人間に見てもらうことはないが、ゴミ箱に捨てられることもない。五人だけの、かけがえない写真だ。

よし、そろそろいくか。  
春太は冠布の中へ頭をつっこんだ。うわ、くせえ。鼻の穴を閉じるのを忘れてた。

ピントグラスをのぞくと、大判カメラがとて単純な構造であることがよくわかる。複雑な部品は何もない。電池もいらぬ。基本はレンズとフィルム。穴から光を取りこみ、その色と像をフィルムの上に写しこむだけだ。難しく考えることは何もない。春太は親父のにおいのする布の中で声を張り上げた。

「はい、いきますー。お母さん、もう少しあごをあげてください。そうです。いいですねー。モモちゃん、両足はまっすぐにね。」

問一 —— 線部2「ここ」が指し示す場所を文章中から抜き出して答えなさい。

問二 —— Aには「次々と打ち寄せて変化をうながすもの」を比喩的に表すことばが入ります。これを漢字一字で答えなさい。

問三 —— 線部9・10は「くちびるをとがらせる」という同一の表現ですが、異なる意味で使われています。このことを説明した次の文章の□ I・II にあてはまることばとして最も適切なものを後からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

—— 線部9は予想と異なる春太の反応に対する□ I な気持ちを表す慣用句として用いられているが、—— 線部10は初めてつける口紅の気持ち悪さや違和感からくる□ II 的な動作を表している。

- |    |      |      |      |      |
|----|------|------|------|------|
| I  | ア 新鮮 | イ 率直 | ウ 心配 | エ 不満 |
| II | ア 行動 | イ 具体 | ウ 悲観 | エ 画一 |

うん、いいよー。ユウトくん、眉のあいだに十円玉がはさまってるよー、うそだよ。でもいまの顔がいいな」  
カメラマンはしゃべってなんぼだ。  
「はい、撮りました」  
五人の顔と体から緊張が抜ける。抜けすぎないほんの短い一瞬をねらって、春太はシャッターを切った。

(荻原 浩 『家族写真』による)

- \*モルタル II 壁の材料の一種。
- \*就活 II 就職活動。
- \*ホリゾント II 撮影をするとき背景として用いる壁。
- \*大判カメラ II 大きなサイズに引き伸ばしても美しさが損なわれない写真を撮ることができる、専門的なカメラ。
- \*11×14 II 大判カメラに用いる写真フィルムのサイズを表す。
- \*クライアント II 仕事を依頼してきたお客。
- \*中卒 II 中学を卒業して。
- \*葉月 II 春太の妹。
- \*屈託 II くよくよ心配すること。
- \*チエーン展開 II 同じお店をいくつも作っていくこと。
- \*プロアー II 風をふきつけて機材の小さなよこれなどを取り除く道具。
- \*冠布 II 大判カメラで撮影するときカメラにかぶせる布。

問四 —— 線部1「自分も〜気がした」とありますが、この気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 長い時間が経っても変化のない店の様子は父の強いこだわりの表れであり、その店を息子に継がせたいという意志には逆らうことができないというあきらめを感じている。
- イ いつまでも変わらない店の中の様子は時間が止まっているかのように思われ、この店を継ぐことにより春太自身の将来の可能性が損なわれてしまうようなおそれを感じている。
- ウ ショーウィンドウに飾られた多くの写真は店の長い歴史を物語っており、父が積み重ねてきた仕事を思うにつけ後継ぎがない現実をあわれに思っている。
- エ ショーウィンドウに飾られた古い写真を見るたびに時代遅れな父のやり方に反発を覚え、店を継ぐからには新しいやり方で立て直していきたいという野心をいだいている。

問五 —— 線部3「いまどきの〜ないだけだ」とありますが、この箇所から読み取れるように、春太は写真館の経営がうまくいっていないと考えています。春太はその具体的な原因を何だと考えているでしょうか。「父の」に続くように、文章中のことばを用いて十五字以内で答えなさい。

問六 ——線部4「中卒で親父」とありますが、こうした背景から生じたと思われる、父親の仕事に対する厳しい姿勢が表現されている形式段落をこれより前の文章中からさがし、その最初の五字で答えなさい。

問七 ——線部5「口より表情がものをいうやつ」とありますが、このことからわかる葉月の性格を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。  
ア 心の中で思っていることが顔に出してしまう素直な性格。  
イ 言葉よりも行動で気持ちを表そうとする活動的な性格。  
ウ 思いを口に出せず表情で伝えようとするひかえめな性格。  
エ 言葉で表現することをもどかしく思うせっかちな性格。

問九 ——線部7「チェーン展開し考えないと」とありますが、「経営」が「ケイエイ」と書かれた理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。  
ア 経験したことのない写真館の経営というものは、葉月にとって想像上のものではないということ表現するため。  
イ 葉月は写真館を経営する難しさを理解しておらず、お店の今後について真剣に考えていないことを強調するため。  
ウ 写真館の将来に不安を感じて悩む春太と、前向きな発想で明るくふるまう葉月の性格のちがいを明らかにするため。  
エ お店の経営に関して無知な葉月が、託された責任に対して言葉でできないおそれを感じていることを表現するため。

問八 ——線部6「どちらがうんだろう」とありますが、これを説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。  
ア 強い決意を持って父とはちがう道を選んだにもかかわらず、春太に店を継いでもらいたいと考えている葉月の強引な説得に心が動かされ、父のようなカメラマンになることに心がたむいていく様子を表している。

イ 写真館を継いで自分の思い通りの撮影をする理想を描いていたにもかかわらず、葉月の押し付けがましい態度を前にして素直になれず、思ってもいないことを説明せざるをえなくなった春太の困惑を表している。  
ウ 春太の思い描く将来像は父と同じようにはなりたくないという思いが大部分をしめているため、それがカメラマンとしてどちらがうのかという問いに答えられるだけの具体的な考えがないことを表している。  
エ 春太は父が代わりばえのない人物写真ばかり撮ることに反発心をいだいているが、風景写真と人物写真のちがいがますます説明できない自分の未熟さに気づき、言葉を失っている様子を表している。

問十 ——線部8「いや、く引きしめる」とありますが、このときの春太の気持ちを説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。  
ア プロカメラマンの道は険しく、くじけそうになっている矢先に写真館を継ぐ機会がめぐってきたことを幸運に感じている。その一方で、うまくいっていない経営のことを考えて厳しい現実と向き合おうとしている。  
イ プロカメラマンになるという困難な道を自分で選んだにもかかわらず、写真館を継いで思い通りの写真を撮ることに魅力を感じてしまっている。そうした矛盾を自覚して無理にでも気持ちを切りかえようとしている。  
ウ 家を継ぐことに反発してプロカメラマンを志しているが、写真館の経営も父親よりうまくやる自信がある。そこで好きに写真を撮って繁盛させることに魅力を感じているものの、そのことを葉月に知られたらばつが悪いと考えている。  
エ 家を継いで好きに写真を撮ることに興味があるが、写真館を経営することに自信が持てずにいる。そこで葉月の協力が得られればうまくやっていると考えている一方で、葉月に自分の弱みをみせまいと思っている。

問十一

——線部11「いまは親父の流儀に従おうと思う」とありますが、春太がこのように思った理由として最も適切なものを次の中から選り、記号で答えなさい。

- ア 家族のかけがえない写真を撮ることの難しさに父親と同じ立場になって初めて気がつき、積み重ねてきたお店の歴史にほこりを持つようになったから。
- イ 斬新さやインパクトのある写真は撮れないが、どんなに緊張していたとしても父親に仕込まれた技術で美しい写真に仕上げる自信があったから。
- ウ 病気の父親を勇気づけるには、これまで教わってきたやり方で写真を撮影し、家族の良い表情を残すことが最も確かな方法だと考えたから。
- エ 失敗が許されない緊張感の中、家族のかけがえない写真を少しでもいい表情で撮影するためには父親のやり方がふさわしいと考えたから。

問十二

この文章は大きく二つの場面に分けることができますが、後半はどこから始まりますか。その最初の三字を答えなさい。

ば一枚の絵を見る。なるほど、そこには描かれてあるいろんな形、色がある。それはある一人の作家がかってに創りだしたもので、あなたとはいちおうなんの関係もありません。しかし、あなたがそれを見ているのは、なんらかの関心があつてのことです。当然、喜び、あるいは逆に嫌悪<sup>けんあく</sup>、またはもつとほかの感動をもつて、それにふれているはずです。

そのとき、はたしてあなたは画面の上にある色や形を、写真機のレンズが対象のイメージをそのまま映すように見ているかどうか、考えてみれば疑問です。あなたはそこにある画布、目に映っている対象を見ていると思いつつ、じつはあなたの見たいとのぞんでいるものを、心の中にみつめているのではないのでしょうか。

それはあなたのイメージ<sup>\*</sup>によって、自分が創りあげた画面です。一枚の絵を十人が見たら面白い、その十人の心の中に映る絵の姿は、それぞれまったく異なった十だけのイメージになって浮かんでいるとみてさしつかえありません。人によって感激の度合いがちがうし、評価もちがいます。同じように好きだといっても A、その好き方はまたさまざまです。

こういうことを考えてみても、鑑賞がどのくらい多種多様であり、それがその人の生活の中にはいつていくばあい、どんなに独特な姿を創りあげるか。それは、見る人数だけ無数の作品となつて、それぞれ心の中で描きあげられたことになりす。さらにそれは、心の中でその精神の力によつてつねに変貌<sup>へんぼう</sup>し創られつつあるのです。

この<sup>3</sup>、単数でありながら無限の複数であるところに芸術の生命があ

四

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(抜き出して答える問題では、句読点、かぎかっこ等の記号は一字として数えること。)

絵画は万人<sup>ばんにん</sup>によつて、鑑賞<sup>かんしょう</sup>されるばかりでなく、創られなければならない。だれでもが描けるし、描くことのよるこびを持つべきであるというのが、私の主張です。

あなたはたぶん、絵というものは絵かきが創るもので、素人は、それを見て楽しむばよい、描くにしてもせいぜい遊び半分に、趣味としてでなくさむものだと思つていられるでしょう。まあ、恥<sup>はじ</sup>をさらすようなものは、なるだけ描かないほうが無事だ、くらいな気分にいる人が多いと思います。

だから、絵はたんに見るものではけつしてなく、だれでもが創るもの、いや、創らなければならぬものだなどと言われると、まったく意外で、びつくりされるかもしれません。

しかし、じつは、見るということ自体に、あなた自身が創るというけはいがなければならぬ。この二つはそれぞれけつして離すことのできないものなのです。まず、これからお話ししましょう。

見たたり味わうことならできるけれども、創るといふ時間がない。あるいは、どうもそれにおみきる積極性がないという人でも、次の問題について考えてみてほしいのです。

創ること、味わうこと、つまり芸術創造と鑑賞というものは、かならずしも別のことがらではないということ。あなたが、たとえ

ります。たとえどんな作品でもすばらしいと感じたら、それはすばらしい。逆にどんなすばらしい作品でもつまらない精神にはつまらなくしかうつらないのです。作品自体は少しも変わつてはいないのに。

<sup>4\*</sup> ゴッホの絵は、彼が生きているあいだは一般大衆にはもちろん、セザンヌのような同時代の天才にさえ、こんな腐<sup>くさ</sup>つたようなきたない絵はやりきれないとソッポをむかれました。当時はじつさい美しくなかつたのです。それが今日はだれにでも絢爛<sup>けんらん</sup>たる傑作<sup>けつさく</sup>と思われまふ。けつしてゴッホの作品自体が変貌したわけではありません。むしろ色は日がたつにつれてかえてくすみ、あせているでしょう。だがそれが美しくなつたのです。社会の現実として。こんなことはけつしてゴッホのばあにかぎりません。受けとる側によつて作品の存在の根柢から問題がくつがえされてしまふ。

こうなると作品が傑作<sup>だくさく</sup>だとか、駄作<sup>ださく</sup>だとかいつても、そのようにするのは作家自身ではなく、味わうほうの側だといふことがいえるのはありませんか。そうすると鑑賞——味わうといふことは、じつは価値を創造することそのものだと考えるべきです。<sup>5</sup>もとになるものはだれかが創つたとしても、味わうことによつて創造に参加するのです。だからかならずしも自分で筆をにぎり絵の具をぬつたり、粘土<sup>ねいど</sup>をいじつたり、あるいは原稿用紙に字を書きなぐつたりしなくても、なまなましく創造の喜びといふものはあるわけです。

私の言いたいのは、ただ趣味的に受動的に、芸術愛好家になるのではなく、もっと B 的に、自信をもつて創るといふ感動、それをたしかめること。作品なんて結果にすぎないのでから、<sup>6</sup>かならず

しも作品をのこさなければ創造しなかった、なんて考える必要もありません。創るといふのを、絵だとか音楽だとかいうカテゴリーにはめこみ、私は詩だ、音楽だ、踊りだ、というふうには枠に入れて考えてしまふのもまちがいです。それは、やはり職能的な芸術のせまさとらわれた古い考え方であつて、そんなものにこだわり、自分を限定して、かえつてむしろかしくしてしまうのはつまりません。

それに、また、絵を描きながら、じつは音楽をやっているのかもしれない。音楽を聞きながら、じつはあなたは絵筆こそとっていないけれども、絵画的イメージを心に描いているのかもしれない。つまり、そういう絶対的な創造の意志、感動が問題です。

さらに、自分の生活のうえで、その生きがいをもつていかにあふれさせるか、自分の充実した生命、エネルギーをどうやって表現していくか。たとえば、定着された形、色、音にならなくても、心の中ですでに創作が行なわれ、創るよろこびに生命がいきいきと輝いてくれば、どんなにすばらしいでしょう。

1 創られた作品にふれて自分自身の精神に無限のひろがり  
と豊かないどりをもたせることは、りっぱな創造です。

2 自分自身の、人間形成、精神の確立です。自分自身をつくっているのです。すぐれた作品に身も魂もぶつけて、ほんとうに感動したならば、その瞬間から、あなたの見る世界は、色、形を変える。生活が生きがいとなり、今まで見ることのなかった、今まで知ることもなかった姿を発見するでしょう。そこです、あなたは、あなた自身を創造しているのです。

\*イメージネーション＝想像力。

\*ゴッホ＝オランダ出身の画家。

\*セザンヌ＝フランスの画家。

\*カテゴリー＝分類。

\*職能的＝特定の役割をこなう様子。

問一 □ Aに入る「人間の考え方や好みと同様でなく、多種多様であること」を意味する四字熟語を答えなさい。

- 問二 ——線部7「こそ」とありますが、これと同じ意味で「こそ」が用いられているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア かつての失敗も、今だからこそ笑って話せる。
  - イ 君のことを思えばこそ、注意しているのだ。
  - ウ 校則が厳しくなることに賛成こそするが、前向きではない。
  - エ 悪いとわかっていて行えば、それこそ大変なことになる。

しかし、もう一歩発展させてみましょう。

創造といふのは、ただ自分個人だけの問題にとどまてはいけません。もし己の感動を外にうちだし、表現すれば、自分以外の人に喜びをひらき、情熱をわきおこさせることになる。そうしたら、それを核としてあなたのまわりの世界が新鮮な彩りを展開しはじめるにちがひありません。

「ああ、いい絵だ」と、感動する。だが、ただそれだけの受け身の鑑賞では、やはり生活の全体が満たされない。自分も描いてみたい、と思う。人間らしい自己表現欲、創作欲です。しかし、描けたらいいな、というところで、たいていはとまってしまふのです。これでは、ほんとうに充実することはできません。

描きたいのに描かずにすましてしまふ。そのあとに、自分ではつきり気がつかなくても、なんとなく味気ない気分がのこる。そういうことがつくりつると、生活自体がひどく消極的で空虚なものになってくるのです。しかも、たいていその空虚さを自分自身で気がつかずにいるものです。

あなたは、展覧会とか劇場などの芸術鑑賞の場で、奇妙にあらまされた、重苦しいけいはいを感じとられたことはないでしょうか。見るものと見られるものとの間のよそよそしさ。それはなんとなくあなたの気分をむなしくする。

「私も描けたらいいな」と思ったら、描いてみるべきだ、いや、描いてみなければいけない、と私は言いきります。

(岡本 太郎 『今日の芸術』による)

問三 □ 1・2に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 1 たとえば 2 また
- イ 1 だから 2 つまり
- ウ 1 したがって 2 しかし
- エ 1 ところが 2 まさに

問四 ——線部9「あらたまつた」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア こぎれいで落ちつかない
- イ 専門的でわかりにくい
- ウ 格式ばって親しみづらい
- エ 無遠慮でずうずうしい

問五 ——線部1「この二つ」とは何ですか。これより前の文章から四字と七字でそれぞれ抜き出して答えなさい。

問六 ——線部2「芸術創造と」別のことがらではない」とありますが、

この理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 鑑賞とは目に映っている対象をただ見るのではなく、作品にふれた人が自分自身の心の中に創り上げた画面を見ることだから。
- イ 作家と作品を見る人は関係がないと思われがちだが、見る人には必ずなんらかの関心があり、作家の創作意欲に影響をおよぼすことになるから。
- ウ 芸術創造とは見る人の欲求にこたえるものでなければならず、作者は鑑賞者の心の中をみつめてそれを正確に表現する必要があるから。
- エ 作品は見る人のとらえ方で異なったものとなるが、作者の思いは他人の手によって新しい作品に受け継がれていくから。

問七 ——線部3「単数でありながら無限の複数である」とはどういうことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。(句読点、かぎかつこ等の記号も一字として数える。)

問八 ——線部4「ゴッホの絵」とありますが、この具体例によって説明されている内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 時間の経過が作品を美しくさせ、傑作を作り上げること。
- イ すぐれた作品を味わうためには精神の力が必要だということ。
- ウ 社会の現実が作品の評価を大きく高めていくのだということ。
- エ 作品のもつ美しさや価値は受けとる側が決めるということ。

問九 ——線部5「もともになるもの」とは何ですか。これより前の文章の中から一語で抜き出して答えなさい。

問十  Bに入ることばとして最も適切なものをこれより前の文章の中から抜き出して答えなさい。

問十一 ——線部6「かならずしも」必要ありません」とありますが、この理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の充実した生命を表現し、自身を創造しようとするれば必然的に形ある作品があると考えているから。
- イ 作品の良し悪しという結果ではなく、自信をもって創るという過程にこそ価値があると考えているから。
- ウ 作品をのこすことにこだわると、せまい枠の中に自分を限定してしまい、自由な創造ができないと考えているから。
- エ 作品として形にのこさなくても、心の中で創作が行われ、創造の喜びを感じることが大切だと考えているから。

問十二 ——線部8「あなた自身を創造している」とありますが、これと同じ内容の箇所を文章中から四十字以内で抜き出し、その最初の五字で答えなさい。

問十三 この文章における筆者の考えとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の感動を外にうちだし、表現することが何より大切である。表現することでまわりの世界に変化を与えられところに芸術のおもしろさがあり、鑑賞するだけでは何か満たされない、空虚な気分がのこる。だから、描いてみなければならぬのだ。
- イ 鑑賞することと創造することは表裏一体だ。作品にふれて心の中に自分のイメージを描き、精神にひろがりやいろどりをもたせることは創造にほかならない。だから、だれでも描くことができるし、描くことによるこびを持つべきである。
- ウ 創造というものは、自分個人だけの問題にとどまっていけないものだ。作品の価値を決めるのは作家自身ではなく味わう側だということ。歴史が証明している。だから、自分にはうまく描けないと決めつけるよりもまず描いてみるのが大切になる。
- エ 絵画はあらゆる人に描かれなければならない。一枚の絵であってもその見方は人それぞれであり、見る人の心の中でつねに変貌し創られることこそ芸術の生命だといえる。だから、新しい作品がより多くの人の手で生み出されなければいけないのだ。

五

次の国語辞典の解説文を参考にして、□□の中に入る「か」で始まることばをひらがなで答えなさい。

1 □□□□

○数を足したり引いたりすること。○熱・水・調味料や力などの加え方を、ほどよい状態に調節すること。また、そのほどよく調節された状態。「塩の量を―する／弱い相手だから少し―して〔多少手を抜いて〕勝負しよう／おふろの―を見る／ちよいどいい―の濃さだ」○「好ましい状態かどうかという観点から見た」暑さ寒さの具合や健康状態。「陽気の―で体調がすぐれない／風邪気味で―が悪そうだ。」

2 □□□□

(感覚の鋭い人に) そのものがそこにある(そうである)ことがわずかながら感じとれる様子。「―に見える一本の道／―な尾を引いたハレー彗星／前途に―な光〔希望〕を見いだす／両国関係に―な改善の兆しが出てきた／―に〔弱々しく〕息づく」

5 □□□□□

そのものをとりまく外界。「それと関係があり、それになんらかの影響を与えるものとして見た場合に言う」―に適應する／―を淨化(整備・破壊)する／国際的―の厳しさ／―が悪い／自然―・社会―・生活―・―工学」

(『新明解国語辞典 第七版』による)

3 □□□□

○目標とする方向からそれて、ある方向へ傾く。「進路が西に―」○特定の場所(物)にだけ集中して、全体の均衡(バランス)を欠く。「党利党略に―」○不公平で正しくない状態になる。

4 □□□□

○通り過ぎたあとを振り返って見る。「別れを告げて一度も―ことなく旅立った／昔を―〔昔どんな事があったか(をしたか)をもう一度考えてみる〕／我が身を―〔自分がしてきた事のよしあしを思い返してみる〕」○世話が十分行き届いているかどうかを、(ゆっくり)考えてみる。「家庭を―暇が無い」

